

# 異文化間コミュニケーションと カルチャー・ショック

松 倉 信 幸

## Intercultural Communication and Culture Shock

Nobuyuki MATSUKURA

### 1 はじめに

異なった文化と出会い、その文化の理解を深める異文化学習のプロセスには、次のような段階が考えられる。そしてこれらの段階を経て異文化への関心が高まるとともに、実際に異文化との接触も増え、理解度が深められる。

第一段階（異文化にほとんど興味が無く、自己の文化に浸っている）



第二段階（実際に異文化に触れて、興味をもつ）



第三段階（異文化への接触や知識が増え、自分の文化と相手の文化の差についての認識が高まり、カルチャー・ショックを受ける）



第四段階（異文化に対して知識や体験が増えて、より寛容で受容的態度で異文化に接するとともに、自分の文化をも見直す）

上記の各段階を人の成長にあてはめて見て行くと、第1段階は英語や外国人にほとんど接触する機会のない小学生までの時期に相当する。第2段階は中学に入り、初めて英語に接したり、教室ではAssistant Language Teachers (ALT)と接する機会を持ち初めて、実際に異文化に接して興味を持ち始める。次に第3段階では、高等学校や大学・短大等で異文化接触や異文化知識が増え、自己の文化と他の文化の違いについて知るようになり、そして実際に海外語学研修やホームステイ等を通して、自己の文化から外の文化へ出て行く段階にあたる。この段階では、異文化に対して程度の差こそあれ、多かれ少なかれカルチャー・ショックを受ける。こうして個人差はあるもののカルチャー・ショックを通して、異文化について以前よりも知識や体験が深まる。最後の第4段階では、異文化について以前よりも慣れてきて、相互の文化の相違点や類似点にも認識が深まり、異文化を寛容的な態度で受容出来る段階に達する。この段階では大学・短大を卒業後に、海外において会社勤務もしくは留学のために長期海外滞在を経てこの段階に達する場合と、自国においても海外に滞在する場合と同様に、英語のネイティブ・スピーカーと毎日接する機会のある環境に置かれて、この段階に達する場合との二通りがある

と考えられる。

## 2. 文化とコミュニケーションの関係

人は無意識のうちにコミュニケーションの仕方を文化から学んでいる。つまり、人間の価値観や審美観、思考様式や行動様式は、そのほとんどが文化の産物である。文化とコミュニケーションはあまりにも密接な関係にあるため、人類学者ホールは文化とはコミュニケーションであると捉えている。

### 2. 1. 翻訳語「文化」の意味

元来、文化は江戸時代後期の元号として中国の古典から採用されたが、柳父章（1995）によると、翻訳語「文化」の歴史は新しく1915(大正4)年にドイツ語のクルトゥール(Kultur)から入り、このクルトゥールは農作物を耕すことから転じて、人間精神を創るという意味になった。この「文化」と比較対象を成す言葉にフランス語から入った「文明」があるが、こちらは元々ラテン語の‘civilis’「市民の」が語源で、市民社会全体の発展や成果の意味で技術や実用に重点が置かれ、いわば物質的文化を指し示す。

### 2. 2. 文化のレベルの二面性

同一文化内において、文化をレベルによって分類すると高等文化と一般文化との二つがある。高等文化の象徴とされるのは11月3日の文化の日に授与される文化勲章や文化功労章で、高度の思想、科学、芸術の活動と成果を意味し、日本の伝統文化である歌舞伎、能、茶道、華道などがこれにあたる。

もう一方の一般文化とは「生活文化」と呼ばれるもので、年中行事や結婚などの社会的習慣や衣・食・住に関わる生活様式などが含まれる。したがって、広く一般大衆に流布しているのがこの一般文化であるため、高等文化と一般文化の価値の高低は無いものと考えられる。

### 2. 3. 文化の構成要素

広く文化を構成するカテゴリーとして、顕在文化と潜在文化の二つがあげられる。顕在文化というのは文化的行事として形式化されたものや、茶道、華道、クリスマス、ハロウィーンなどが含まれる。もう一方の潜在文化は精神文化といえるもので、具体的には人間関係のとらえ方やプライバシーの範囲などを意味し、日本人が英語ネイティブ・スピーカーと接する場合に最も誤解や摩擦を感じるのは顕在文化に直面した時よりも、形式化されない潜在文化が原因になっている時である。

またさらに、Almaney and Alwan (1982)によると、文化は次に示すように(1)Artifacts (人工物)、(2)Concepts (概念)、(3)Behaviours (行動)の3つのカテゴリーに分類される。

### 2. 3. 1. Artifacts (人工物)

ある文化で作り出された品物を意味し、日用品や建築物、あるいは美術作品などがこれにあたる。この人工物は上記で述べた顕在文化に相当する。

### 2. 3. 2. Concepts (概念)

文化において重要なのは、内面的な精神文化すなわち潜在文化である。そこでこの精神文化には①世界観、②価値観、③思考形式等が考えられる。

#### 2. 3. 2. 1. 世界観

文化人類学の視点では、普遍的特徴という面から見た世界観は人間、自然、神（仏）の3つの要素とその相互関係に支えられていると言われる。すなわち神（仏）・人間・自然の関係の認識は世界観の中心的存在である。

日本では神や仏のような超自然的存在と人間と自然の間は連続し、上下の明確な区別は無い。つまり人間や自然に神性や仏性が宿ると信じられている世界観である。これに対して欧米ではキリスト教のような一神教の世界では、全能な神は絶対的な存在として人間と自然を支配し、人間は自然を支配する上下関係が認められている。

#### 2. 3. 2. 2. 価値観

価値観は下中弘(1971)によると、「文化的次元において行動を律する導因になっている主観的なもの」を意味する。テキサスにおける民族の文化の特徴に関する比較研究を行った人類学者のKluckhohnとStrodtbeck(1960)によると、民族の5種類の価値項目として①人間性、②人間と自然、③時間、④行動、そして⑤人間と人間とに分類し、さらに①から⑤をそれぞれ3種類に分類している。5つの共通の問題意識は下記のとおりである。

- (1) a. What is man's assessment of innate human nature?
- b. What is man's relation to nature?
- c. What is the temporal focus of life?
- d. What is the group's principal mode of activity?
- e. What is the modality of the group's relationship to others?

##### ① 人間観

人間性を生得的に、1) 生来善性、2) 生来悪性、3) 生来善悪両性に分類し、その文化によっていずれかを志向する。日本人は生来善悪両性の考えで、アメリカ人は楽観的な生来善性の人間性である。

##### ② 自然観

人間が自然に対して、1)人間が自然を支配、2)人間が自然に服従、3)人間が自然と調和のいずれの態度をとるかによって、その文化の自然観が決定する。ここでは、日本人は人間が自然と

調和し、アメリカ人は人間が自然を支配する。

### ③ 時間観

時間の認識に関して、1)未来志向、2)過去志向、3)現在志向のいずれを重視するのか、その文化に属する人間によって時間の認識の差が理解できる。日本人は過去のしきたりや伝統を重んじると同時に、将来の仕事に達成感をもとめる未来志向という二面性を持っているが、アメリカ人は伝統は気にせず、未来の目的に向かって進む未来志向である。

### ④ 行動様式

行動様式として同様に次の3タイプ、1)する(行動型)、2)ある(受動的な存在型)、3)ある・なる(自然変革型)があげられる。日本ではある事態があたかも自然のなりゆきでそうなったと考える、自然変革型であるが、アメリカは行動型である。

### ⑤ 社会観

ここでは周囲の人間と自己をどうとらえ、いずれを重視するかによって、1)個人志向(自立型)、2)縦関係志向、3)横関係志向があげられる。日本人は集団の中で、横関係よりも縦関係の方に重点を置き、アメリカ人は自立型の個人志向である。

## 2.3.2.3. 思考形式

米国でアメリカ人学生と外国人学生のレポートを分析したロバート・キャプランによると、英語系のアメリカ人学生が問題の核心を目指して直線的に進む思考をするのに対して、東洋語系の学生は、長い前置きや間接的な話題によって渦巻状の思考をする。日本語はあいまいな表現を好み、蚊取り線香のように長い前置きや間接的な話題を述べることによって渦巻状の思考をする。しかし英語はストレートないわば矢印状の単刀直入な表現をする。

## 2.3.3. Behaviours (行動)

日常生活、行事、スポーツなどのように、文化は行動としても表れる。総理府の世界6か国で20歳から59歳の女性を対象に行われた、「婦人問題に関する国際比較調査」によると、家計費管理の最終的決定者として「妻」の割合が高いのは、フィリピン(84.1%)、日本(79.4%)である。また、「夫と妻の両者」が多いのは(旧)西ドイツ(70.4%)、スウェーデン(31.2%)、アメリカ(45.5%)となっており、イギリスは「夫」、「妻」、「両者」がそれぞれ3等分されている。しかし、家計費管理は妻が握っていても「男性の方が優遇されている」と考えているのは、日本(66.8%)が最も多く、次いでアメリカ(47.8%)であり、フィリピン(30.1%)、スウェーデン(31.2%)は低い。「男女平等」というのはスウェーデン(62.8%)が最も高く、欧米で4割前後である。以上の点から、欧米では家族、夫婦が家計・家事に参加する度合いが日本よりも高いことがわかる。

## 2. 4. コミュニケーションの意味

「コミュニケーション」の原義はラテン語の‘communis’に由来し、「神との交わりにあづかる」という意味で、OEDには「共に享受すること」という意味もある。先にあげたホールによると、「コミュニケーションは一人の個人からもう一人の個人に意味を移す過程を意味する」。また「コミュニケーションとは記号を選択・創出・伝達することによって、伝達者と同じ意味を受け手が知覚出来るようにする過程である」と述べている。

コミュニケーションは意識レベルのみならず、無意識レベルでもやりとりされ、「人はコミュニケーションをせざるを得ない」のである。

## 2. 5. ことばとコミュニケーション

人がさまざまな事象を知覚、認知および意味づけをするときには、言語の影響を受けると考えられる。その言語がどのような言語であっても、言語にはそれぞれ特徴があって、その言語を話す人の認知や思考の様式に影響を与えるというサピア・ウォーフの仮説がある。このサピア・ウォーフの仮説とは、言語はその言語使用者のものの見方に影響を与えるため、使用言語が異なれば、知覚・思考も違ってくるとい主張である。この点について、哲学者ヴィトゲンシュタインも、「私の言語の限界は、私の世界の限界ということになる」と述べている。

## 2. 6. ことばをこえたノンバーバル・コミュニケーション

コミュニケーションには時間、空間、ジェスチャー、表情、視線、歩き方、服装など多くの要因が関わっており、このような言語以外のあらゆるメッセージを非言語メッセージという。外国語を異文化コミュニケーションの道具として学ぶならば、バーバル(言語)の面とノンバーバル(非言語)の面の両方を学習する必要がある。またこの両者の使用頻度について、バードホイステル(1970)によると、対人コミュニケーションにおいて言語メッセージが占める割合は35%程度で、残りの65%は非言語メッセージによると述べている。したがって、異文化間コミュニケーションにおいて、ノンバーバル・コミュニケーションを構成するジェスチャー、顔の表情、まなざし、姿勢等に対する意思表示の仕方や相違点を理解する必要がある。

## 2. 7. 翻訳におけることばの限界

日本語には雨の降る時期によって、「春雨」、「五月雨」、「夕立」、「秋雨」、「時雨」などの区別があるが、英語には無く、「五月雨」を文字通り‘May rain’あるいは‘early summer rain’と訳すことは可能である。しかし、芭蕉の「五月雨を集めてはやし最上川」の「五月雨」の意味に当てはめることは不可能である。つまり、「五月雨」というのは旧暦の五月の長雨すなわち梅雨のことで、しとしとと降ったりやんだりのうっとりしい感じは、梅雨の存在しない英語のネイティブ・スピーカーにはわからないからだと思われる。

また同様に、『雪国』や『源氏物語』を翻訳したサイデンステッカーは、芭蕉の「山路きて

何やらゆかしすみれ草」の「ゆかし」や、蕪村の「春の海ひねもすのたりのたりかな」における「のたりのたり」を翻訳不可能と述べている。

### 3. カルチャーショック

心理学者によると、カルチャー・ショックは、自分の文化をなしている生活様式、行動、人間観、価値観などとは多かれ少なかれ異なる文化に接したときの、感情的衝撃、認知的不一致として把握されることが多いが、決してそれだけにとどまらず、それに伴う心身症状や累積的に起こる潜在的、慢性的パニック状態を引き起こす。

#### 3. 1. カルチャー・ショックの要因

文化摩擦ひいてはカルチャー・ショックは互いの文化を背景にした相互作用によって生じるのであるから、天候、空間、距離などの物理的要因以上に、文化の違いによる要因を相互に比較考察しなければならないと思われる。

##### 3. 1. 1. 個の論理と集団の論理

日本人は農耕民族であったために、簡単には他の土地に移動できなかったことから、忍耐強くなり、しきたり、和、協調性を重んじてきたのである。こうして日本では、教育の面においても和を重んじ、集団の規律を重視してきたのであるが、これは長所であると同時に弱点にもなっているのである。一人になった場合、自分の意見を主張して相手を説得することが不得手である。また、日本の社会は同質社会、均質社会であるため、基本的に異質なものを排除する社会と言われる。したがって、帰国子女は海外に出国した時よりも日本に帰国してからのほうが順応するのに苦労するといわれる。

##### 3. 1. 2. 自己主張の文化と自己減却の文化

アメリカの社会では自己と他者が異なることに価値があり、子供の成長過程において個性や意志の発達を尊重する。そしてこの個性が社会において成功の鍵となる。したがって、アメリカ社会では自己の個性や存在を主張することは、日常ごくあたりまえのことなのである。しかし日本の社会では自己主張はおごり、自慢、目立ちたがり、利己的であるなど否定的にとらえられる。学齢期の子供を持つ日本人の母親が話をする際、「おたくのお嬢さんはおできになるからいいわね。うちの子なんて、できなくて本当に困るわ。」というように、自己を謙遜し逆に相手をほめる。ところが、アメリカ人の母親は自分の子供をほめちぎるのである。日本においてこのように卑下したり謙遜することは、常に相手が自分をどのように考えているかという集団社会の心理に基づいている。しかし、こうした卑下や謙遜は英語におけるコミュニケーションにおいては障害となり誤解を生むので注意すべきである。

### 3. 1. 3. 二元論的思考と一元論的思考

欧米の思考形態は物事を黒か白か、イエスかノーかの両極端でとらえる二元論的思考で、古代ギリシャより続き、対立概念を生み出してきた。これとは対照的に東洋の思想は対立概念を持たないのである。つまり東洋では、主体と客体、善と悪、静と動、生と死などが統一的相互関係の中にあるととらえている。

### 3. 1. 4. 論理的思考と非論理的思考

アメリカの高校や大学ではスピーチは必須科目であり、アメリカ社会ではいかに相手を説得するかが成功の鍵となっている。また多民族、多人種の同居するアメリカ社会では、日本のように「以心伝心」では通じないので、コミュニケーションは必然的に理論的にならざるをえない。これに対して、日本人はあまり物事を筋道立てて考え、話すことは得意ではないと思われる。物事を理論づけて考える理由は、国民性にも起因すると思われるが、その教育制度にもあると考えられる。ブルーネット(1993)によると、日本とアメリカの小学校4年生程度の授業を比較すると、日本の先生は生徒に対して「この問題の正解は何ですか」といった質問をする。これに対して生徒は答えが分かる者は答えるのであるが、わからない者は「わかりません」と答える。ところがアメリカの先生は生徒に対して、「どうして」とか「あなたはどう思いますか」というような解答よりも考え方を重視する質問をするのである。その際に先生は解答の正解よりも生徒の考え方や理論の立て方に対して評価すると言われる。

### 3. 1. 5. キリスト教的罪悪感と日本的恥の文化

『菊と刀』の著者Benedict(1954)によると、欧米社会は「道徳の絶対的基準を説き、良心の啓発を頼みにする社会」として「罪の意識」を持っている。しかし日本社会は外面的強制力に基づいて善行を行う「恥じの文化」を持つと述べている。つまり、恥じの文化では人前で恥をかかないことが道徳の原動力になる。もう一方の罪の文化では、悪い行いがたとえ人に知られなくても、自ら罪悪感にさいなまれるのである。

### 3. 1. 6. 低コンテクスト文化と高コンテクスト文化

Hall(1977)は意味の伝達・解読過程で、文脈に依存する率の高い文化を「高文脈依存文化」(high context culture)、反対に文脈に依存する率の低い文化を「低文脈依存文化」(low context culture)とよんでいる。コミュニケーションにおいて、文脈依存度が高まるにしたがって、意味は言語情報の中ではなく文脈の中に潜むことになる。したがってことばの役割は最小限に抑えられ、「言わなくてもわかる」というようになる。しかし、文脈依存度が低くなるにしたがって、意味は文脈から離れて言語情報の中に内在する。この場合、言葉の役割は最大限に発揮される。

日本人は高コンテクスト文化で生活しているので、メッセージをこと細かにたくさん交わし

たり、それを論理的に厳密に組み立てなくても、「以心伝心」といった欧米人にはとても不可解なコミュニケーションを行う。これに対して、低コンテクスト文化のアメリカ人は、多量の情報を論理的に組み立ててメッセージを送ることによってコミュニケーションを行う。

### 3. 2. カルチャー・ショックの予防

カルチャー・ショックすなわち文化衝撃、あるいは文化摩擦は異質な文化が相互に接触した時に、不可避な緊張、葛藤に続いて発生する社会現象と捉えることが出来る。カルチャー・ショックは人により、状況により程度の差はあるものの、異文化と接触する際にはどうしても避けることの出来ない体験である。このカルチャー・ショックを少しでも軽減するには、基本的には相手国の言葉を習得し、それと同時にその国の文化事情を知る必要がある。そして相手国の文化を受容する寛容さと、その文化に適用しようとする忍耐も必要である。

#### 3. 2. 1. 異文化の受容

異文化理解教育について、日本ユネスコ委員会は、「国際理解とは文化の相互理解 (Intercultural Understanding) だと言える。そして、他国・他民族・他文化の理解では、世界文化の多様性を受容する相互尊重と、寛容な態度および共感的な理解ということが重要となるであろう。」と述べている。したがって異文化を拒絶するのではなく、寛容な態度で時として忍耐も要する。

#### 3. 2. 2. 文化学習と言語習得

現在の英語教育では、受信・発信の両能力の養成を目指している。臨教審だより16号によると、「これまでのようないわゆる受信専門ではなく、発信・受信両用になるべきであるということである。(中略) このためには、日本と他国との共通点と相違点について正しく理解しなければならなくなるし、意志を伝達し合うための言葉の問題も生じてくる。また、自分で表現する力を持たないと自己主張も出来ないことになるため、個性を生かすことも必要になってくる。」と述べている。これからの英語教育は実際のコミュニケーション活動において、文化の相違点がコミュニケーションに与える影響についても理解出来るように、可能な限り実際のコミュニケーションの訓練の場において異文化学習も同時に行う必要がある。

#### 3. 2. 3. 文化相対主義の視点

文化相対主義とは、それぞれの文化をおのおのの独立した価値において対等に認め合い、自己の価値基準で判断しようとせず、異文化について関心を持ち、自分の文化との類似点と相違点を正確に受け止めることを意味する。またそうした判断の出来る自己の確立も要求される。今後コミュニケーション活動がますます地球的規模で展開されるに応じて、こうした異文化間の相互理解と相互尊重の文化相対主義の視点に立ったコミュニケーション活動が望まれるのは言うまでもない。



### 3. 2. 4. 多文化・多言語教育

多民族・多文化・多言語社会であるアメリカでは、異文化間コミュニケーションを円滑にはかるために、小・中学校では多民族教育や多文化教育が行われている。多様な少数民族を抱えるアメリカでは英語を母語としない少数民族の子供に、英語と母語の二言語を用いて授業を行う試みがなされている。また、異文化間相互理解を育成するための教育プログラムとして、イリノイ大学で「異文化同化プログラム」が考案され、アメリカ人にアラブ人、ギリシャ人、タイ人等の異民族の行動様式を理解させることを主眼として、異文化の女性観や人間関係観などについても、アメリカ人の自文化中心主義的な価値判断を実例をもってあげ、それがなぜ誤解されるかを自分で考えるように指導を行っている。

### REFERENCES

- Almaney, A.J. & A.J. Alwan. 1982. *Communicating with the Arabs*. Waveland Press.
- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』. 大修館.
- 坂東眞理子. 1991. 『図説世界の中の日本の暮らし』. 大蔵省印刷局.
- Benedict, R. 1954. *The Chrysanthemum and the Sword*. Charles E. Tuttle Company.
- Birdwhistell, R. 1970. *Kinesics and Context*. University of Pennsylvania Press.
- ブルーネット和子. 1993. 『気配りコミュニケーション』. 白馬出版
- コンドン, J. 1980. 『異文化間コミュニケーション』. 近藤千恵訳. サイマル出版会.
- 古田暁監修. 1990. 『異文化コミュニケーション・キーワード』. 有斐閣双書.
- \_\_\_\_\_. 1987. 『異文化コミュニケーション』. 有斐閣選書.
- ホール, E. 1966. 『沈黙のことば』. 國弘正雄, 斎藤美津子, 長井善見訳. 南雲堂.
- \_\_\_\_\_. 1977. 『文化を超えて』. 岩田慶治, 谷泰訳. TBSブリタニカ.
- 橋本満弘, 石井敏編. 1993. 『日本人のコミュニケーション』. 桐原書店.
- 本多吉彦. 1994. 『人間関係から見た英語学』. 酒井書店.
- 本名信行編. 1993. 『文化を超えた伝え合い』. 開成出版.
- \_\_\_\_\_. 1994. 『異文化理解とコミュニケーション』. 三修社.
- 小島義郎. 1988. 『日本語の意味・英語の意味』. 南雲堂.
- 下中弘編. 1971. 『哲学事典』. 平凡社.
- 鳥飼玖美子. 1996. 『異文化をこえる英語』. 丸善ライブラリー.
- 鍋倉健悦編. 1990. 『日本人の異文化コミュニケーション』. 北樹出版.
- 鈴木龍一, 水落一朗, 佐野政之. 1995. 『異文化理解のストラテジー』. 大修館.
- ロボ, F, 津田葵, 楠瀬淳三. 1984. 『英語コミュニケーション論』. 大修館.
- 柳父章. 1995. 『一語の辞典文化』. 三省堂.